

# 乗雲

寺報  
第79号

## 安居修行

(あんこしゆぎょう)

道元禅師は「正法眼蔵随聞記」の中で、『海中に竜門と云う処あり、浪頻に作なり。諸の魚、波の処を過ぐれば必ず竜と成るなり。中略 叢林に入れば必ず仏となり祖となるなり。食も人と同じく(食し、衣も人と同じく)服し、飢を除き寒を禦ぐ事も同じけれども、ただ頭を円にし衣を方にして齋粥等にすれば、忽ちに衲子となるなり。成仏作祖も遠く求むべからず。ただ叢林に入ると入らざるとなり。竜門を過ぐると過ぎざるとなり。』と示されている。

魚が竜門を過ぎると竜になるように、志をおこして仏の道に入つた者も、志を同じくする者たちとともに修行することによって道を成ずることができる。



弟子(三男)は三月五日、四国愛媛県新居浜市にある仏国山瑞應寺専門僧堂に安居修行に入った。道元禅師の頃より変わることにない修行者の姿(如法の旅支度)をして上山した。

魚が竜門を過ぎると竜になるように、志をおこして仏の道に入つた者も、志を同じくする者たちとともに修行することによって道を成ずることができる。

現在瑞應寺様のご住職は檜崎通元老師という方で、永平寺で先住洞光和尚と修行を共にしている。同寺の先代檜崎一光老師は大本山永平寺の副貫首を務められた方であるが平成八年にご遷化(死去)されている。私が永平寺修行中、一光老師は後堂職(修行者の指導者)であつたが、その時の言葉が今も心に残っている。修行者は、『獅子児だ、獅子は、子が生まれて三日経つとその子を千尋の谷へ投げ落とし、生き残つた子、這い上がってきた子だけを育てる。苦しい試練を経てこそ本物の人となる。』道場はいい加減であつてはいけない。気持ちを引き締めて何事も立ち向かつていかなければならない。との戒めと受け取っている。

入門してまだ一ヶ月余り、食事、坐禅、読経、托鉢等日々の行持が古来の作法どおりに進められている。お檀家さんもあるのですが法事もまかせられる。一通りのことを覚えるには一年はかかる。

四国は弘法大師の八十八ヶ所があり仏国土、良き師のもと恵まれた環境でしっかり修行を積んで欲しい。

### 平成二十二年度年回表

「回忌」	「没年」
一周忌	平成二十一年
三回忌	平成二十年
七回忌	平成十六年
十三回忌	平成十年
十七回忌	平成六年
二十三回忌	昭和六十三年
二十七回忌	昭和五十九年
三十三回忌	昭和五十三年
五十回忌	昭和三十六年
百回忌	明治四十四年

\* 今年の年回忌のご案内は、昨年十二月に正当の各家に通知いたしております。  
\* 日曜・祝日のご法事の申し込みはお早めにお願ひいたします。

「周」は「めぐる」ことを意味する言葉で、亡くなってからちょうど一めぐりした翌年のその日を一周忌と呼ぶ。回忌とは亡くなられた日を最初の忌日と考えて、三回目の忌日が「三回忌」となる。以降は丸六年目が七回忌となる。